■ 資料紹介 ■

国分寺（旧国分寺市文化財保存館資料）の石棒と関連資料

野口　淳

はじめに

国分寺市文化財保存館から武蔵国分寺跡資料館へ引き継がれた国分寺所蔵の考古資料には、市内の先史時代資料が多数含まれている。これらは市史編さんのための貴重な資料であり、考古グループで調査を進めている。本稿ではそのうち、縄文時代の石棒と関連資料を報告する。

一．国分寺所蔵資料（旧国分寺市文化財保存館資料）の概要

国分寺市文化財保存館（以下、旧保存館）は、昭和二七年（一九五二）に国分寺町（当時）により現国分寺境内に開設された。その収蔵・展示資料（以下、旧保存館資料）は、保存館開設時の国分寺住職（第二八代）で、後に国分寺町長（昭和三三～三九年）、市制施行後の初代国分寺市長（昭和三九～四四年）を務めた星野亮勝氏が自ら調査収集したものと、寄贈品からなる。これらは基本的に、国分寺の所蔵品である。全体で三千点を超える収蔵品は、昭和三九年に一括して「国分寺所蔵資料（旧国分寺市文化財保存館資料）」として市重要有形文化財に指定された（武蔵国分寺資料館編二〇二四）。

なお星野氏は、昭和二三年（一九四八）に国分寺市熊ノ郷遺跡でローム層中から石器を発見していたことでも著名である。これは群馬県岩宿遺跡における日本最初の旧石器時代遺跡の発掘調査（昭和二四年）の前年であった（岩宿遺跡の発見は昭和二一年）。

国分寺市文化財保存館はその後、平成二十一年（二〇〇九）に施設老朽化により閉館となった。その資料は国分寺市武蔵国分寺跡資料館に引き継がれた（武蔵国分寺跡資料館編二〇一〇）。特に武蔵国分寺跡に関連

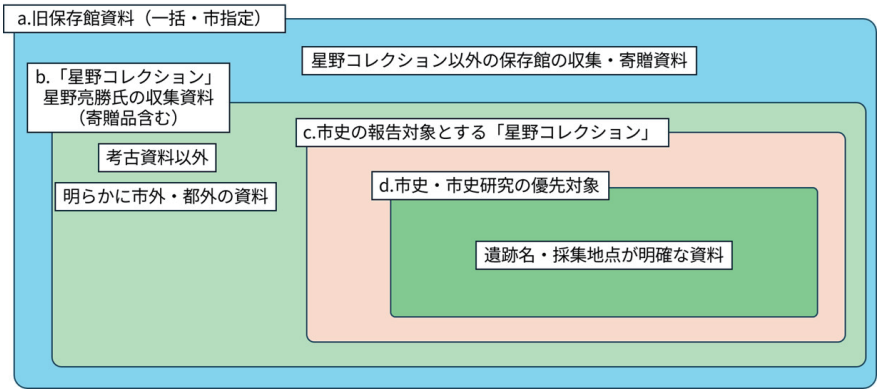


図１　旧保存館資料の構成

する奈良・平安時代の瓦等は同資料館で常設展示されている。先史（旧石器・縄文）時代では、縄文土器・土製品五点、同石器・石製品三十点が常設展示されている。令和六年（二〇二四）十～一二月に同資料館で開催された企画展「文化財保存館の歴史を振り返る一五年目の蔵出し展」では主要資料が展示されたが、通常は収蔵庫に保存されている（武蔵国分寺跡資料館編二〇二四）。

旧保存館資料の大半は考古資料であり、武蔵国分寺跡に関連する奈良・平安時代の瓦、須恵器、土師器などが多いが、縄文時代の土器・石器も含まれる。ただしそれら全てが国分寺市内の出土・採集品ではない。注記や目録台帳には、府中市高倉のように明らかに市外の遺跡や地名がある。さらに立木（たつぎ）貝塚、花輪台（早尾）貝塚のように東京都外のものも含まれる。

これらは星野亮勝氏が自ら調査、収集したものだけでなく、さまざまな経緯で星野氏のもとへ、または旧保存館へもたらされたようである。[1] 今回の市史編さん事業では、旧保存館資料を、国分寺市内の考古学的様相を明らかにするだけでなく、星野亮勝氏による考古学調査・研究のあゆみを知るために学史上の意義のある資料として

も位置づけ、評価する（図1）。

二．国分寺市内出土・採集資料の概要

旧保存館資料のうち国分寺市内出土・採集資料と考えられるのは、一．資料に注記があるもの、二．既往の文献に言及があるもの、三．旧保存館から引き継がれた台帳に記載があるものである。先史時代資料に記載がある地名として「滝久保」「押切間（おしきりま）」[2]などの字名と「国分寺裏山（本堂裏山）」「鐘楼」「真姿弁天前」などの地物名称がある。図2では、それらの地名に加えて、本稿で取り上げる石棒の出土地としての「国分寺村石器時代遺跡」の位置を地形図上に示す。

これらを現在の国分寺市の遺跡（周知の埋蔵文化財包蔵地）に対比すると、多喜窪（No．一一）遺跡、八幡前（No．一八）遺跡、武蔵国分寺跡（No．一九）、本町（No．二八）遺跡に該当する（図3）。星野亮勝氏の調査・収集活動が、おもに国分寺を取り巻く範囲であったことが窺える。

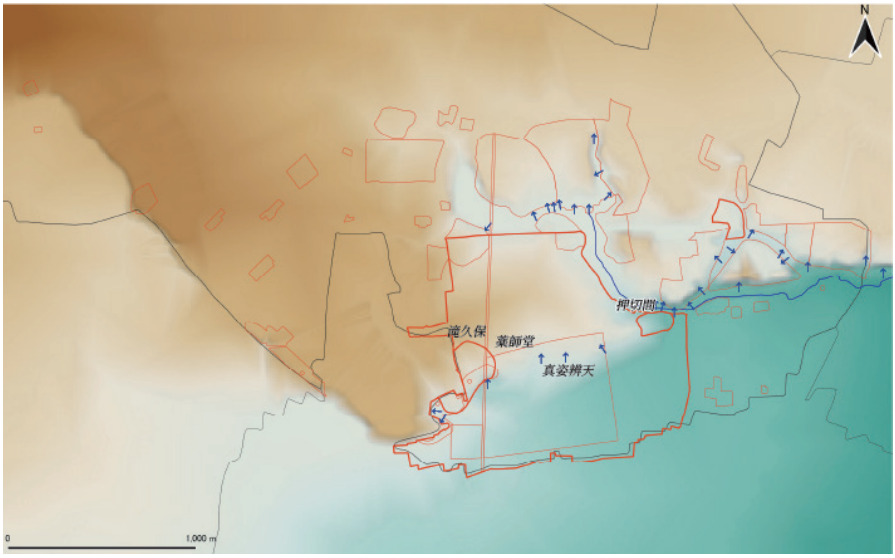


図2　旧保存館資料に関連する地名（赤線：国分寺市埋蔵文化財包蔵地範囲）

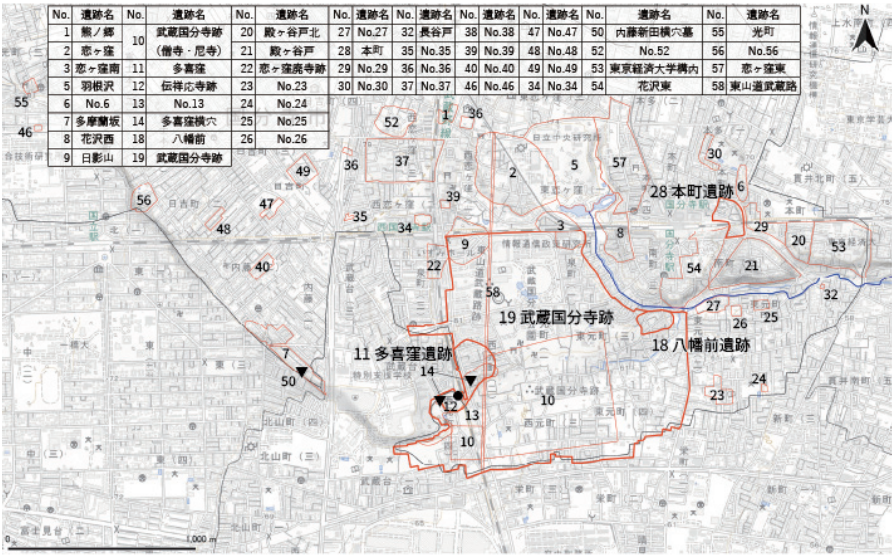


図３　国分寺市埋蔵文化財包蔵地地図

三．旧保存館資料中の石棒と関連資料（表１）

旧保存館資料には二点のほぼ完形の大型石棒がある。うち一点は旧保存館の目玉資料でもあったようで、さまざまな出版物等に掲載もされている（稲村一九五九）。他に、今回の調査により多孔石一点が石棒の転用品であると判断した。

（一）本町遺跡出土石棒（図４～６）

旧保存館資料台帳に「本町か？」と記載されていた。今回、文献資料調査により「明治末年に現国分寺駅開設当時に地下から発掘したものであり、」の記述を確認した（稲村一九五九：二四頁）[4]。これにより明治二二（一八八九）年の甲武鉄道（現在のＪＲ中央本線）の開業に先立つ工事で開削された露頭で鳥居龍蔵らにより発見、調査された「国分寺村石器時代遺跡」すなわち本町遺跡（大野・鳥居一八九四～五、黒尾・依田二〇二二）

表１　掲載資料一覧[3]

図	ID	器種	出土・採集地点	石材	重量
4～6	321	石棒	本町遺跡	緑泥片岩	33.0kg
7	322	石棒	（村山付近）	緑泥片岩	9.6kg
8	196	多孔石	多喜窪遺跡か？	デイサイト	5.6kg

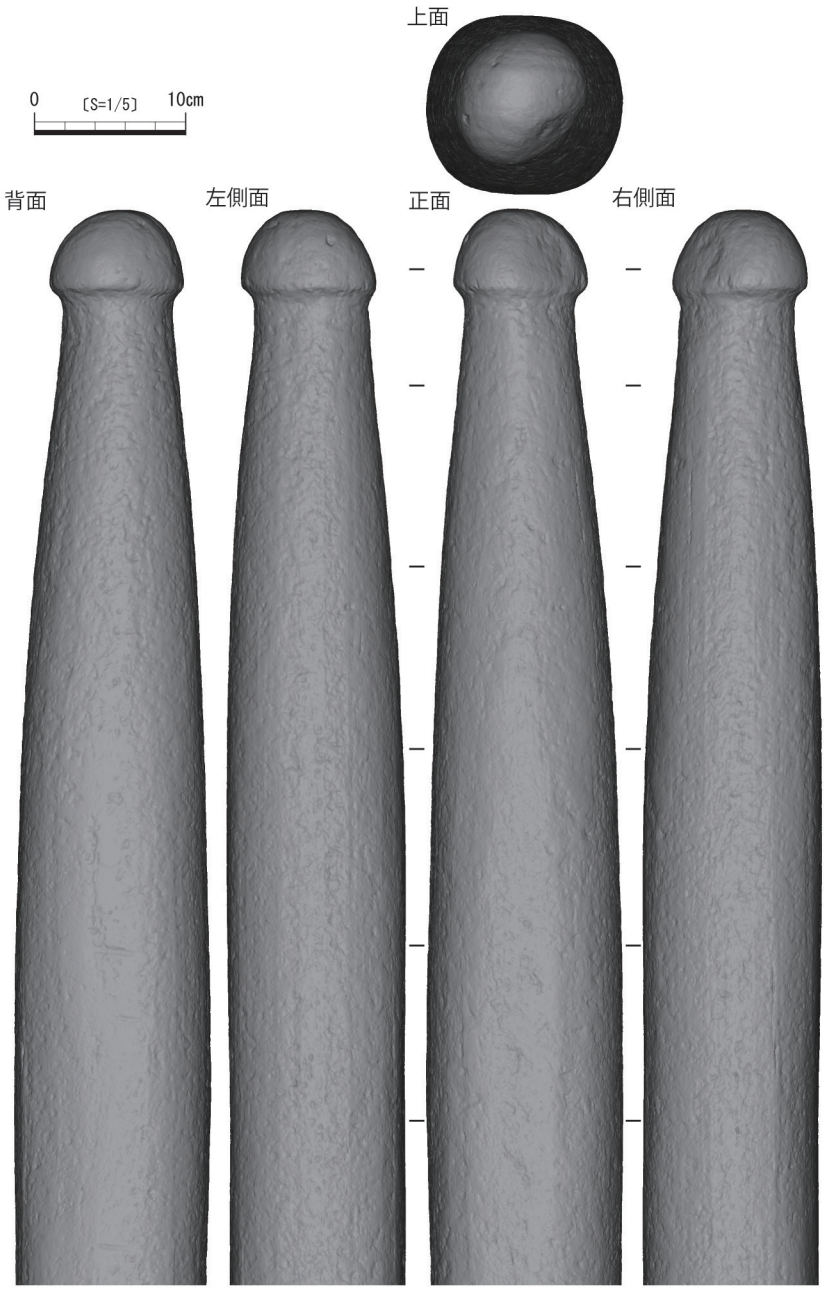


図 4　本町遺跡出土石棒（1）

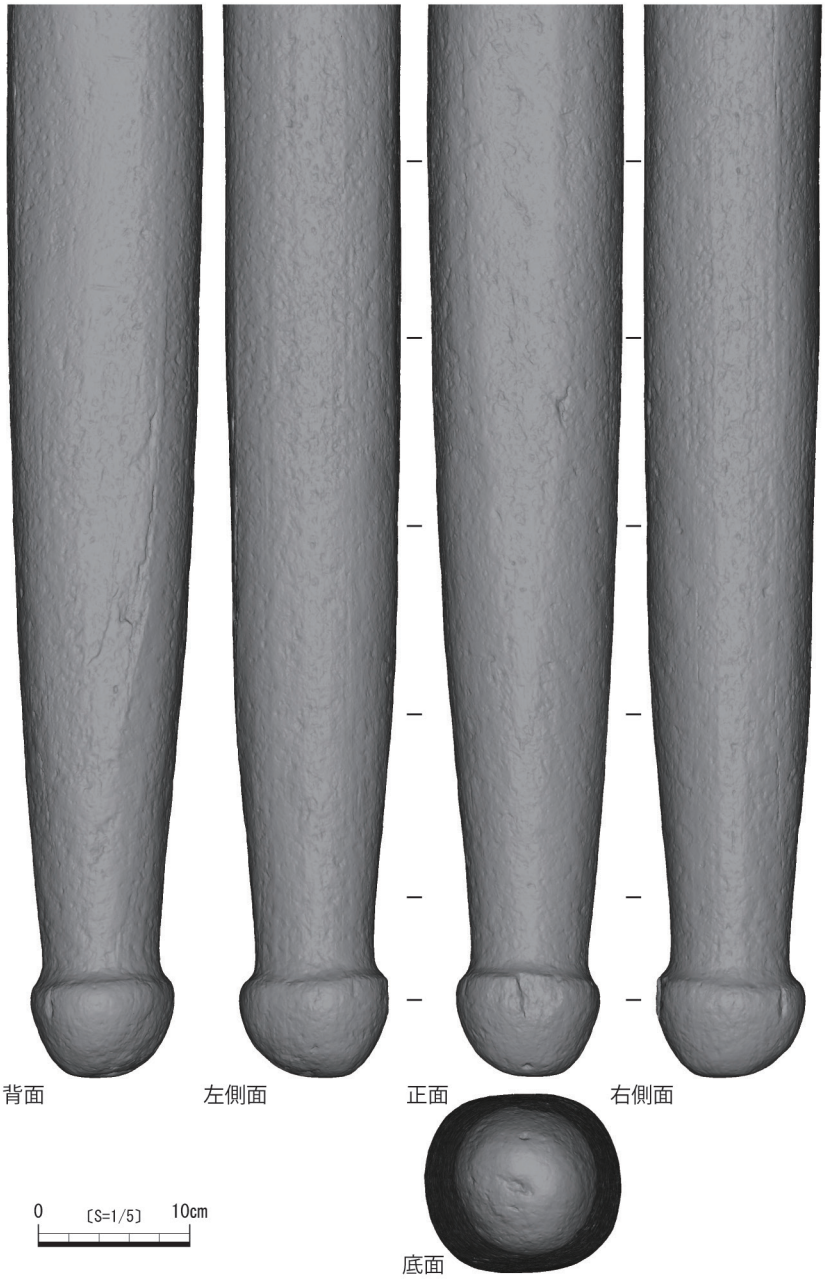


図 5　本町遺跡出土石棒（2）

の出土品であると判断された。

緑泥片岩製の双頭の完形品で、笠は一段、最大長一二〇七㎜、最大直径一三〇×一一九㎜、重量三三〇〇kg（表2）。仕上げの研磨による滑らかな表面だが、敲打による小さな凹みも全面に観察される。笠の直下の頚部は断面の円形度が高いが、胴部中央に向かい隅丸の方形状断面になる。角柱状の素材を用い、笠部～頚部についてより多く加工したことが窺われる。素材には正面―背面

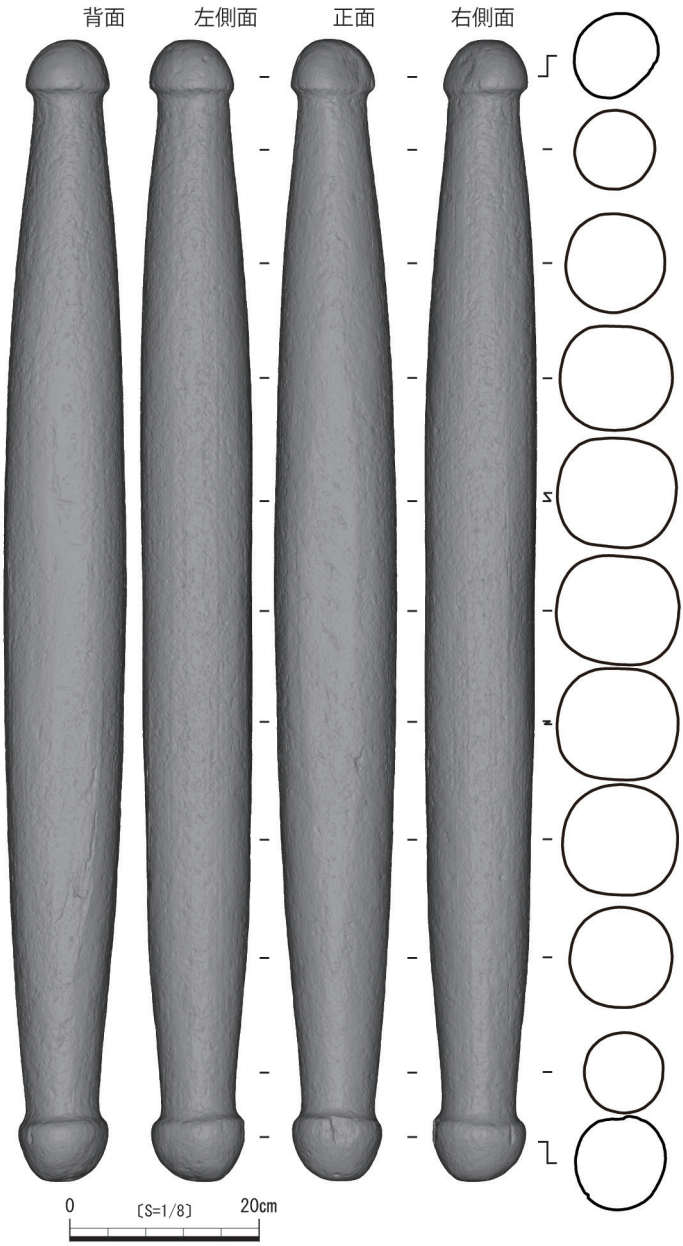


図6　本町遺跡出土石棒（3）

に平行する方向に走る層理構造が見られ、底部笠正面と右側面に、整形時のものと考えられる層理に沿った剥離・破損が残る。上部笠正面～右側面に残る剥離は層理に対して斜め四五度である。連続断面が示す通り表裏―左右の対称性が高いが、底部側では中心軸より右側に偏っている。笠の基底も、底部側が傾いている。また笠のサイズは基部側がやや大きい。ただし、これら偏位は全体から見るとわずかで、均整の取れた形状である。被熱痕跡は無い。

表２　本町遺跡出土石棒：計測値一覧（単位：㎜）[5]

本町遺跡	長さ (y)	幅 (x)	厚さ (z)	位置 (Δ y)
全体形状	1207.27	130.343	118.516	-
笠部（上）	53.655	88.863	89.363	1153.62
頚部（上）	-	75.793	78.110	1146.79
頚部（下）	-	77.883	79.515	76.567
笠部（下）	70.154	95.202	98.954	0
体積	11,168,100㎣			

（二）「村山付近」採集石棒（図７）

旧保存館資料台帳に「村山付近採集」と記載されていた。国分寺市内では、過去に遡っても「村山」の地名は知られていない。近隣では、砂川村（現立川市）に「村山道上」「村山道下」の小字名がある。[6] 独立した地名としては、距離が離れるが旧村山村・町（現武蔵村山市）がある。大正六年（一九一七）に、中藤村ほか二村が合併して成立後、町制施行を経て、昭和四五年（一九七〇）の市制施行時の改称まで存続していた。星野亮勝氏の活動時期には村山村として存在していたので、これを指している可能性がある。ただし重量のある大型資料のため、国分寺まで運搬してきたのかという疑問も残る。現時点では採集地の同定には至らなかった。

緑泥片岩製の単頭の完形品だが背面側が強く被熱しており、表面が赤化変色して面的な剥離が進んでいる。胴部三カ所に全体を横断する亀裂が走っており、そのうち中央部分で破断している。笠は二段、底部は平坦に加工されている。最大長六六八㎜、最大直径一〇五×九三㎜、重量九・六㎏である（表３）。被熱している背面以外は、仕上げの研磨による滑らかな表面が観察されるが、敲打による小さな凹みも全面に観察される。笠の直下の頚部～胴部上半は断面の円形度が高いが、胴部中央ではやや幅広の隅丸方形状の断面となる。笠部と胴部の断面から見て、やや幅広であるやや扁平な角柱状の素材を用いた

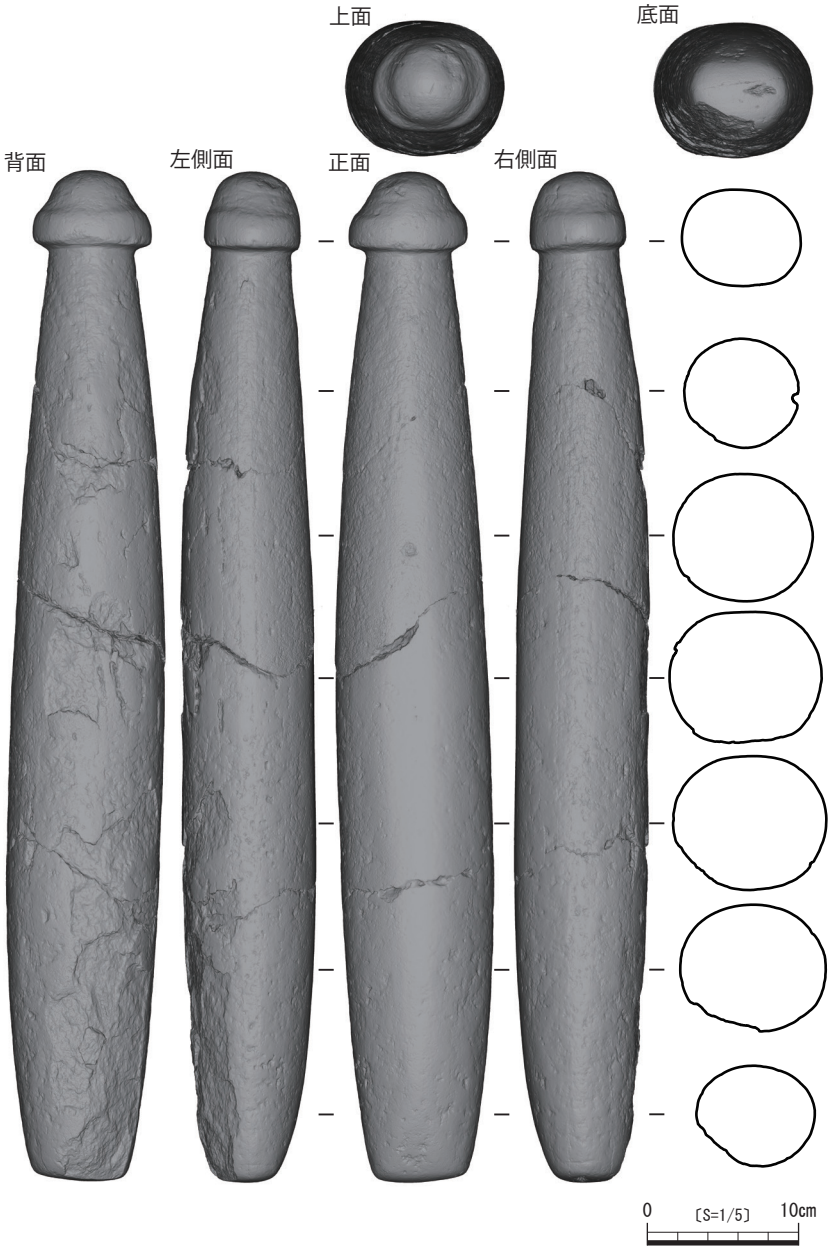


図７　「村山付近」採集石棒

と推定される。

素材には正面―背面に平行する方向に走る層理構造が見られる。背面の被熱による剥離も層理に沿って発生している。連続断面が示す通り表裏の対称性が高いが、平面（正面・背面）形状が示す通り、胴部中央付近～底部にかけて長軸が右に傾いており、側面形状は緩やかなS字状に波打っている。しかし全体形状はよく整っている。

表3 「村山付近」採集石棒：計測値一覧（単位：㎜）

「村山付近」	長さ (y)	幅 (x)	厚さ (z)	位置 (Δ y)
全体形状	668.022	105.307	93.191	-
笠（上）	51.299	78.641	63.801	616.723
笠（段上）	-	63.681	57.876	64.475
笠（段下）	-	78.608	63.717	62.787
頚部（上）	-	56.503	53.073	61.145
底面	-	65.483	47.715	5.591
体積	3,658,310㎜³			

（三）多孔石（多喜窪遺跡か?）（図8・9）

旧保存館資料台帳には出土・採集地の記載が無いが、多喜窪遺跡出土・採集の可能性がある。デイサイト製で、上面は破断している（図9太線内範囲）。正面左上と右下は破損しているが底面はおおむね完形である。現存状態で、正面に約二七箇所、背面～右側面に約五九箇所の凹み・穿孔が観察され、多孔石として記載・登録されてきた。ただし、素材礫形状をそのまま利用するものでも、石皿の転用品でもなく、底部を平坦に整える加工状態と、やや扁平な隅丸方形の段目から見て、石棒の破損品の転用の可能性がある。

残存最大長は二〇七．七〇㎜、最大幅一六八．一六㎜、最大厚一一八．七五㎜、重量五．六kgである。凹み・穿孔は最大直径約九～二二㎜、深さ約四～一四㎜で、残存部の正面・背面に満遍なく、密に形成されており、複数隣接している箇所もある。上部破断面に斜めにかかっている凹み・穿孔も見られるため、現存の状態になってから形成されたと推定される。なお底面には凹み・穿孔は見られない。

四．資料の評価

（一）帰属時期

大型の有頭石棒は、縄文時代中期に出現し、後期・晩期まで続いたとされる（谷口二〇二一）。今回報告する資料は、出土地が高い確度で推定されるものから不明なものまで含む。本町遺跡出土と推定されたものも線路工

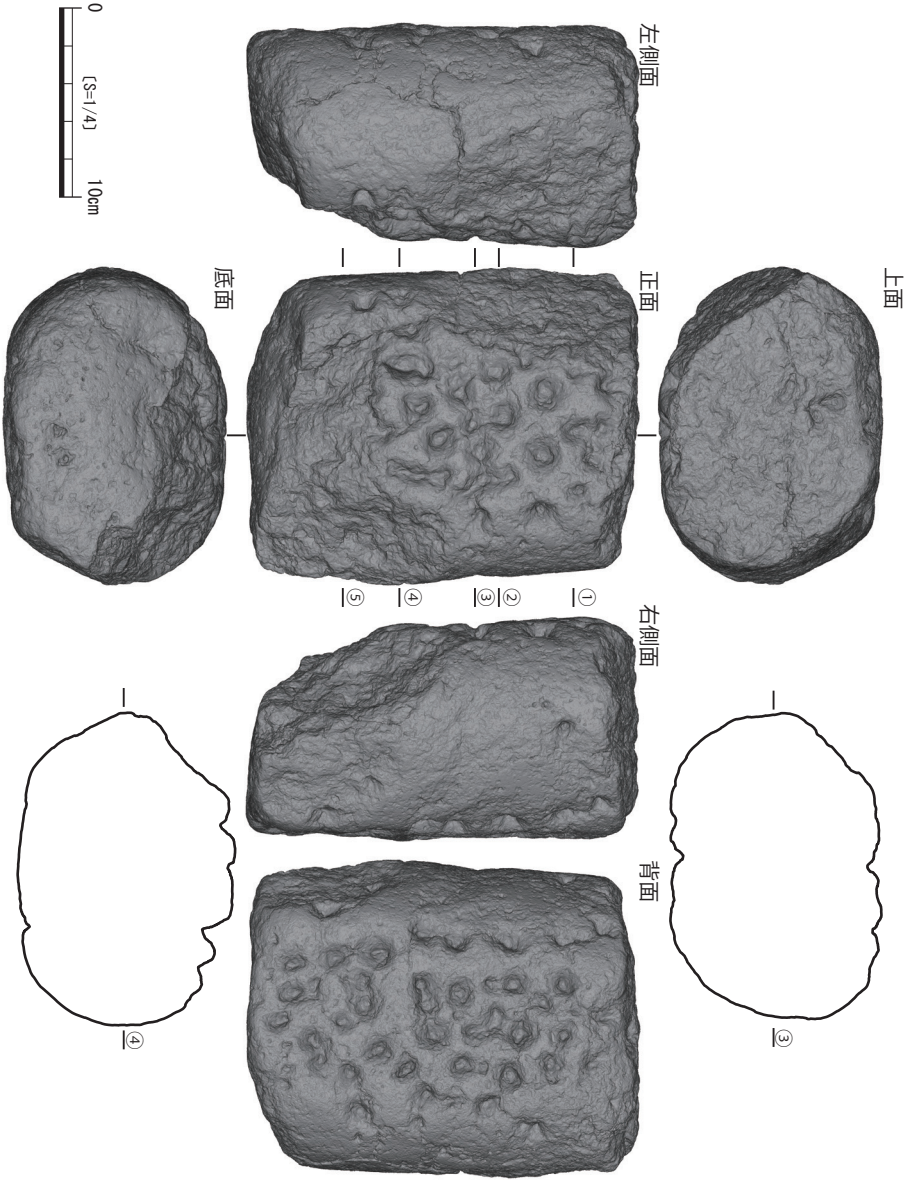


図 8　多孔石（多喜窪遺跡か？）（1）

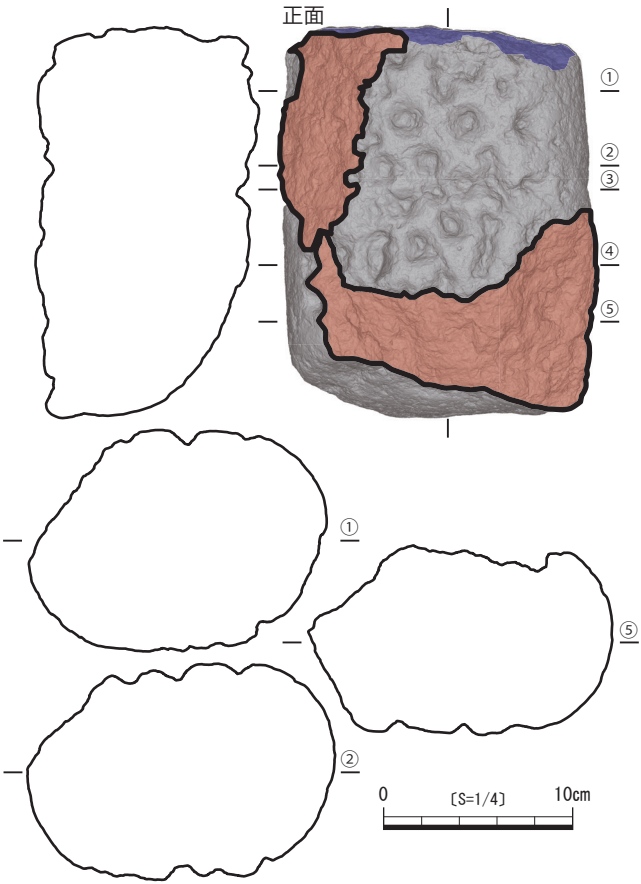


図９　多孔石（多喜窪遺跡か？）(2)

が集成している。遺跡出土資料としては、国分寺市花沢西遺跡第二次調査区（福田・広瀬一九八六）、恋ヶ窪遺跡第一四・一六～一九・二一・二六次調査区（国分寺市遺跡調査団編一九九一・二〇〇八）、府中市武蔵台遺跡Ｊ二二号住居跡（都立府中病院内遺跡調査会編一九九四）、根岸病院構内採集（武蔵台遺跡：中山一九九八）がある。

武蔵台遺跡出土資料は、縄文時代中期末の柄鏡型住居跡に伴うもので、被熱・破断した状態で出土した。花沢西遺跡出土資料は遺構に伴わないが、中期末～後期初頭の土器が伴う。恋ヶ窪遺跡出土資料は二点あるが中期後葉とされる住居跡の覆土出土である。

範囲を広げて武蔵野台地南部、多摩川中流域を見ると、国立市緑川東遺跡第二七地点（(株)ダイサン編

事時の不時発見で、遺構・遺物との共伴関係は不明である。そこで、近隣の関連資料との対比から、時期や本来的な出土状態を推測する。

国分寺市域を中心とする野川上流部の石棒については、今回報告資料二点を含めて既に中山（一九九八）

二〇一四）で、大型石棒四点が縄文時代中期末～後期初頭の敷石住居の床面から並置されて出土している。他の類例も中期末～後期初頭が多く（山本一九九六）、今回報告資料についても同時期の遺構に伴っていた可能性が高いと推測される。

なお谷口（二〇二一）は、緑川東遺跡第二七地点の石棒出土状況について、北側に近接する立川市向郷（むかいごう）遺跡（立川市向郷遺跡調査会編一九九二）の縄文時代中期集落の終焉に伴い、同遺跡の集団が保有・継承していたものが廃絶・埋納された可能性を指摘している。大型石棒についてこのような長期的なライフサイクルを想定する場合、今回報告資料についても製作時期が縄文時代中期中葉～後葉に遡る可能性も考えられる。

（二）出土状況

大形石棒の被熱事例から、意図的に火にかける「儀礼的行為」が推測されている（山本二〇〇六、鈴木二〇〇七、谷口二〇二一）。鈴木（二〇一二）は、半面が焼けた石棒の出土状況から、倒された状態で火にかけられたことを推定した。

「村山付近」採集の石棒は半面（背面）のみが顕著に被熱している。類例との対比から、住居跡の床面に配置・埋置された状態で火を受けた可能性も想定される。ただし本資料については来歴が不明なため、被熱痕跡が本来の考古学的状況を反映しているかどうかは定かでは無い。

本町遺跡出土資料は、現在のＪＲ中央本線の線路工事および国分寺駅の工事に伴い発見された。本町遺跡のこれまでの発掘調査区および検出遺構からみると、住居跡の分布の南側に位置する可能性が高い。本町遺跡の住居跡の中心的な時期は縄文時代中期中葉～後葉であるが、前述のとおり、その時期の移行に伴うものか、またはその時期の集落の廃絶後に残されたものかのいずれかと推測される。被熱痕跡が見られない点は、緑川東遺跡第二七地点との共通性を指摘できる。

（三）大型石棒としての位置づけ

本町遺跡出土資料、「村山付近」採集資料ともに大型石棒に位置付けられる。とくに本町遺跡出土資料は約一・二ｍを計り、東京都内だけでなく日本列島全体でも大き

な部類に含まれる。中村（二〇二〇）の集成に基づくと、東京都内では町田市忠生（ただお）A遺跡、青梅市千ケ瀬（ちがせ）採集資料、あきる野市三島神社所蔵資料に次ぐ第四位の大きさであり、双頭石棒としては最大となる。大きさそのものに意義があるわけではないが、完形で残されていたという点からも、緑川東遺跡第二七地点の事例と類似する状況の可能性が推測される。

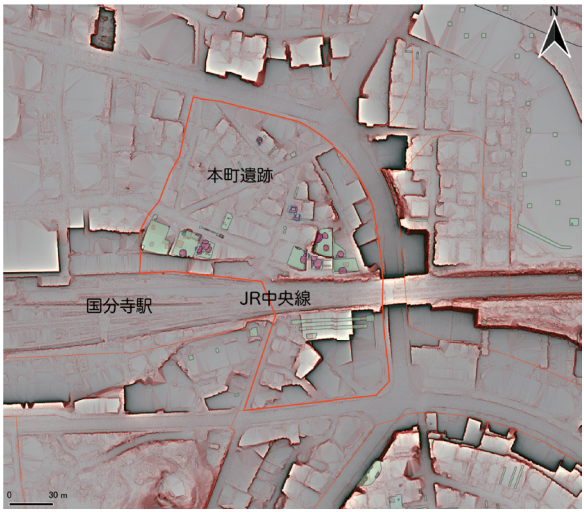


図 10　本町遺跡の既往調査区と周辺の微地形表現図

（四）石棒を転用した多孔石

完形のものを含む石棒の表面に凹みを穿つ＝穿孔する事例はこれまでにも多く報告されている（長田二〇〇八、中島二〇一二）。谷口（二〇二一）は、これらが必ずしも転用と言えず、石棒そのものに伴う儀礼的行為であった可能性を指摘している。

今回報告資料については、破断面にもかかる凹み・穿孔があることから、石棒としての形態が失われた後に「多孔石」となっているという認識で「転用の可能性」としたが、実際の行為の意図・目的についての判断は保留しておく。

本資料の注目すべき点は、石材、形態が他二点と大きく異なることである。類例として、デイサイト製石棒転用の多孔石が、本町遺跡第一六次調査（未報告）で一点出土している。しかしデイサイトという石材、石棒転用でかつ多数の凹み・穿孔を持つという点で、武蔵野台地・多摩川流域ではあまり例を見ない。

石材に関しては、現在の山梨県北西部～長野県東部、八ケ岳～霧ケ峰一帯に産するものと、肉眼観察レベルで

類似点が指摘できる。これを手掛かりに類例を探ると、山梨県北杜市上ノ原遺跡（上ノ原遺跡発掘調査団一九九九）に代表される八ヶ岳南麓一帯に確認される[7]。上ノ原遺跡では安山岩製の多孔石が多いがデイサイト製も一定数が認められ、石棒の転用品も含まれる（図版四七一―四〇六）。国分寺市内の縄文時代遺跡について、土器だけでなく石器からも中部高地との関係を確認できるならばその意義は大きいだろう。

おわりに

あらたな国分寺市史編さんに向けた市内の考古資料の調査の一環として、これまで詳しく報告されていなかった石棒と関連資料三点を報告した。

資料調査にあたって国分寺市武蔵国分寺跡資料館の協力を得るとともに、国分寺市史編さん調査員中山真治氏、国分寺市市史編さん室木村遊氏に全面的に補佐いただいた。記して感謝いたします。

付

今回の資料調査・報告では、対象資料を３Ｄ写真計測により記録した。解析・３Ｄモデル作成はAgisoft Metashapeを使用し、Wavefront OBJ形式でデータを書き出し、CloudCompareを利用して展開図・断面図（図四～八）を作成した。なお原図は全て原寸（Ｓ＝１／１）で、フルカラー、陰影図（グレースケール）およびフルカラー陰影図を作成しているが、印刷版『市史研究』には縮小したグレースケール版を掲載している。オンライン版には原寸図版が添付される。３Ｄモデルは国分寺市教育委員会ふるさと文化財課のSketchfabアカウント（https://sketchfab.com/kokubunji_city_bunkazai）で公開される。

図２・３・10は、国分寺市教育委員会ふるさと文化財課が管理する国分寺市内遺跡地図ＧＩＳデータを用いて、遺跡（周知の埋蔵文化財包蔵地）範囲、既往調査区、検出遺構等を描画している。背景地図（データ）として、図２：国土地理院基盤地図情報数値標高データ（十ｍメッシュ）、図３：国土地理院電子高度基本図単色地図、図９：東京都デジタルツイン多摩地域点群データ微地形表現図（赤色立体地図）（〇．二五ｍ）を用い、Ｑ－ＧＩＳにより図化・画像化した。

注

1　特に武蔵野博物館・武蔵野郷土館の調査に協力した際に取得したと思われる資料（立木貝塚・花輪台貝塚等）がある一方で、星野亮勝氏が収集資料を寄贈した事例も少なくないようである。中山真治氏のご教示による。

2　星野亮勝氏の活動時期を考慮すると、これら字名の範囲は昭和三年国分寺村全図、昭和十五年国分寺町土地宝典に対応するものと考えられる。しかし江戸～明治期の小名（小字）と、昭和期の小字の範囲が一致しない部分もあり（東京都公文書館編二〇二二）、実態についてはさらに検討する必要がある。

3　ID321は最小目量二〇〇g、ID322・196は最小目量一〇〇gの上皿秤で計量し、目視により重量値を読み取った。

4　国分寺市市史編さん室木村遊氏の調査による。

5　長さ方向をy軸、幅(正面図における左右)方向をx軸、厚さ(正面図における奥行き)方向をz軸とする。位置（Δy）は、底部を原点としたy軸上の計測位置までの距離を示す。

6　『東京府北多摩郡砂川村全図』（一九二九年）

7　山梨県南アルプス市教育委員会保阪太一氏、長野県富士見町井戸尻考古館小松隆史氏よりご教示いただいた。

引用・参考文献

稲村坦元　一九五九『武蔵国分寺と上代文化』国分寺町文化財保存館

上ノ原遺跡発掘調査団編　一九九九『上ノ原遺跡　ダイワヴィンテージゴルフ倶楽部造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

大野延太郎・鳥居龍蔵　一八九四～五「武蔵國北多摩郡国分寺村石器時代遺跡」『東京人類學會雑誌』九―一〇二・十―一〇六・一〇七・一一一

長田友也　二〇〇八「大形石棒にみる儀礼行為」『考古学ジャーナル』五七八

株式会社ダイサン編　二〇一四『緑川東遺跡　第二七地点』国立市文化財調査報告五五、国立市教育委員会

黒尾和久・依田亮一　二〇二二「大野延太郎・鳥居龍蔵の提唱した「遺物包含層」の本態～本町（国分寺村石器時代）遺跡の過去と現在を繋ぐ～」『東京の遺跡』一二二

国分寺市遺跡調査団編　一九九一『恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅴ（図面・写真図版編）』国分寺市遺跡調査会

国分寺市遺跡調査団編　二〇〇八『恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅴ（本文編）』国分寺市教育委員会

鈴木素行　二〇〇七「石棒」『縄文時代の考古学十一』同成社

鈴木素行　二〇一二「大形石棒が埋まるまで一事例研究による『石棒』（鈴木二〇〇七）の改訂一」『縄文人の石神一大形石棒にみる祭儀行為一』六一書房

立川市向郷遺跡調査会編　一九九二『向郷遺跡』

谷口康浩　二〇二一『土偶と石棒　儀礼と社会とドメスティケーション』雄山閣

東京都公文書館編　二〇二二『東京都公文書館・国分寺市教育委員会共催企画展リーフレット「史料に見る国分寺のあゆみ～江戸時代の村々～」』

都立府中病院内遺跡調査会編　一九九四『武蔵台遺跡Ⅱ　資料編2』

中島将太　二〇一二「石棒にみられる痕跡について」『縄文人の石

神一大形石棒にみる祭儀行為」』六一書房
中村耕作　二〇二〇「石棒に願いをこめた縄文人」『北沢の大石棒』佐久考古学会
中山真治　一九九八「府中市武蔵台発見の石棒」『東京の遺跡』五九
福田信夫・広瀬昭弘　一九八六「第七節　市内の遺跡」『国分寺市史　上巻』国分寺市
武蔵国分寺跡資料館編　二〇一〇『武蔵国分寺跡資料館だより』一
武蔵国分寺跡資料館編　二〇二四『令和六年度秋季企画展「文化財保存館の歴史を振り返る十五年目の蔵出し展」』国分寺市教育委員会
山本暉久　一九九六「柄鏡形（敷石）住居と石棒祭祀」『縄文時代』七
山本暉久　二〇〇六「浄火された石棒」『神奈川考古』四二
渡辺忠胤　二〇〇〇「星野亮勝さんを偲んで」『多摩考古』三〇

のぐち　あつし
原始・古代・中世部会専門員
公立小松大学次世代考古学研究センター
特任准教授